宮崎県立看護大学研究紀要21（1）：25～34，2021

実践報告

地域で開催される育児教室を活用した母性看護学実習の教育的効果
－退院後の母子の生活の捉え方に焦点を当てて－

壹岐さより，長鶴美佐子，大野理恵，長友舞

【要旨】

近年の少子化に伴い，分娩件数は減少傾向にある。そのため母性看護学実習では学生の学ぶ機会や場所の制限という課題を有し，学ぶ機会を得たとしても幼い子どもと接する機会の少ない学生にとって，その学修の機会を生かすことが難しいことがある。

そこで教育上の工夫の一環としてA大学母性看護学実習では，数年前から地域で開催される育児教室への参加を取り入れてきた。今回，効果的な母性看護学実習方法への示唆を得るために，育児教室参加実習による学生の学びや気づきについて実習レポートを分析し，明らかにすることを目的とした。

対象は，母性看護学実習を終了した３年生のうち研究協力の得られた100名分（回収率94.3%）の実習レポートである。学生の実習レポートを精読し，育児教室に関連した学びや気づきが記述された文章を抽出し，意味内容の共通性を見ながらサブカテゴリー，カテゴリー化を行った。その結果，学生は育児教室に参加することによって病棟実習では描きにくかった【産後の母子の生活の見え方】が広がり，【母子の交流の意味】を理解できただけでなく，【育児教室という社会資源の必要性】を見出すことができていた。さらに育児教室の支援者の関わりから【母子の支援のポイント】を捉え，学生自身で【母子の支援と課題】を見出すことができていた。

【キーワーズ】　母性看護学実習，地域で開催される育児教室，退院後の母子の生活，教育的効果

Ⅰ．序論

１．はじめに

近年の少子高齢社会を始めとする社会環境の変化に伴い，様々な場面に適切に対応できる看護実践力を持つより質の高い看護職者の育成が求められる。

母性看護においても，母子やその家族を取り巻く環境も大きく変化している中で，対象を広い視野で見つめ母子への看護を実践することが求められ，それを可能にする基礎的な力を培うことが教育に求められる。しかしながら，母性看護学実習の特徴として，それらを学ぶ機会や場所の制限という課題を有し，学ぶ機会を得たとしても生活経験が乏しく妊産褥婦や幼い子どもと接する機会の少ない学生にとって，その学修の機会を十分に生かすことができず教育上の工夫を要する。

このような現状を踏まえ，A大学の母性看護学実習では，数年前から地域で開催される育児教室への参加を取り入れ，参加者の母親から退院後の母子の

Sayori Iki，Misako Nagatsuru，Rie Ohno，Mai Nagatomo：宮崎県立看護大学

生活状況を直に聴き学ぶ機会を設けている。育児教室には受け入れ学生人数の制限があるため，学生の約半数が参加し，参加していない学生は実習カンファレンスで育児教室参加学生の体験を共有する学修を行っている。

母性看護学実習において地域の子育て支援などを取り入れているところは少なく[1) 2) 3)]，その方法や効果についてまだ確立されているとは言い難い。

数少ない研究の中で，母性看護学実習に2日間の保健センター実習の中で地域の子育て支援の見学実習を取り入れ，その成果を明らかにした研究[4)]がある。この研究では，地域の子育て支援の見学実習により，母子を取り巻く状況や問題について退院後の生活などを視野に入れて考えることや場の違いによる多様な看護方法を学ぶことできる可能性が示唆されている。

しかしながら，この研究で実施された2日間の見学実習は多くの教育機関が導入するには困難が伴うと思われる。一つには限られた母性看護学実習時間数の中で展開することの難しさが伴うことが予測される。さらに保健センター実習を取り入れた学校の学生数は比較的小規模であり，学生数の規模によっては，全員が実習できるための実習施設確保の難しさが生じることも考えられる。

A大学でも育児教室参加実習を取り入れ，約2時間という実習時間で実施してきた。短時間の実習であっても育児教室参加学生のレポートには，退院後の母子や家族への視点の広がりを感じさせる記述が多くみられること，またカンファレンスでは，体験の共有により参加していない学生にも退院後の母子や家族の生活のイメージの広がりがみられることを実感してきた。

そのためこのような育児教室参加実習が学生にどのような学びや気づきをもたらすのかを明らかにすることは，実習時間及び場所等の制約の中で，効果的な母性看護学実習方法を模索する教育機関への示唆を与えるものと考える。

そこで育児教室参加実習に関する学生の実習レポートを分析し，育児教室参加実習による学生の学びや気づきについて明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方法と対象

1．育児教室参加実習を含む母性看護学実習の概要

1）本実習の位置づけ

本実習は，3年次後期に開講している臨地実習Ⅱの母性看護学実習の中で実施した。

2）育児教室参加実習の目的

①地域で生活する母子や家族がどのような生活を送っているのか，その生活の中でどのような悩みや思いを持っているかについて理解する

②育児教室スタッフの支援内容とその意味について理解する

3）実習方法

育児教室参加実習は母性看護学実習2週間のうちの半日であり，午前中に臨地実習，午後に育児教室参加実習としている。産科医療施設の病棟または外来で妊産褥婦の受け持ち実習を経験した後に育児教室参加実習を行い，再び産科医療施設での実習に戻り，育児教室での学びを再考できるようにしている。

育児教室に参加する学生は，グループメンバーで話し合い，それまでの実習での経験や学生の意思をふまえて決定している。

育児教室は，健康診断や栄養相談，母乳相談などの母親への支援やリズム遊びや親子体操などの子どもへの支援などで構成され，毎回20～25組の親子が参加している。1回の教室に4名の学生が参加する。学生は，各相談や講座に参加しながら親子と会話をしたり，時には母親だけが講座に参加する間，子どものお世話をしたりしながら実習を行う。教室の終了時には，助産師である担当スタッフとカンファレンスを行い，翌日に教員と育児教室に参加しなかった学生を交えた1時間程度の「実習カンファレンス」で学びを共有する。

2．研究対象

2018年度に母性看護学実習を終了した3年生の育児教室参加および実習カンファレンス参加後の学びについての自由記述のレポート

3．研究方法

1）研究デザイン：質的記述的研究

2）分析方法

（1）学生が提出した実習レポートを精読し，学びや気づきが記述されている文章を抽出する。

（2）抽出した文章の意味内容の共通性をみながらグループ化を行い，グループごとの意味を抽象化してサブカテゴリー，カテゴリー化を行う。

（3）カテゴリー間の関連性をみながら，地域で開催される育児教室を活用した母性看護学実習の教育的効果について考察する。なお，分析前に学生の実習レポートを読み，育児教室参加学生と実習カンファレンス参加の学生において学びの内容には相違がないことを共同研究者間で確認した。分析は共同研究者間で行い，分析の妥当性を確保した。

3）倫理的配慮

該当する授業科目の成績決定後に対象となる学生全員に対し，研究目的，方法，研究参加は自由意思であること，研究への承諾と成績は無関係であること，匿名性を含めた倫理的配慮について，文書を用いて口頭で説明し，文書で承諾を得た。承諾書の提出は，研究者がいなくなってから提出できるように教室後方に回収箱を設置し，自由意思を妨げないように配慮した。本研究は，宮崎県立看護大学倫理審査委員会の承認を得ている。（承認番号：13）

Ⅲ．結果

3年生106名中100名より同意を得た（回収率94.3%）。

1. 学びや気づきの意味内容の抽出

学生の実習レポートより学びや気づきが記述されている文章は128抽出できた。それらの意味内容の共通性に着目しグループ化を行った結果，16のサブカテゴリー，5つのカテゴリーを形成することができた。【】をカテゴリー，＜＞をサブカテゴリー，「」を記述内容で示す。

1）【母子の支援のポイント】

このカテゴリーは，37の記述を含む3つのサブカテゴリーで形成された。

「母親が行うことを見守り，アドバイスを加えることで，母親が継続できるようにサポートしていく」「母親の生活の様子や子どもの発達に合わせた個別的なアドバイスで，インターネットの情報よりも自分に合った方法が見つかる場となっている」というように学生は，母親自身がインターネットで自分にできる方法を見つけてくるのと違い，支援者が母親の生活と子どもの発達を重ね合わせた上で継続できる方法を伝えていることに気づいていた。このような11の記述から＜*子どもや生活環境の個別性に合わせる*＞ことや「会った時から恰好や表情からアセスメントしたり，授乳の様子を観察して情報を集めていくことが必要である」というような８の記述から＜*適切な支援につなげるために細やかに観察する*＞という支援のポイントに気づくことができていた。ほかにも「支援者は母親たちがしていることを決して否定せずに助言する働きかけ」など14の記述から＜*母親の気持ちに寄り添いながら母子一体で関わる*＞が重要なポイントであることも理解していた。このように学生は，支援者の関わりから母子の支援のポイントを捉えていた。

2）【産後の生活の見え方の広がり】

このカテゴリーは35の記述を含む4つのサブカテゴリーで形成された。

「託児で（たった）1時間でも腕が痛くてあと背中もつらかった」「育児に追われ自分の時間が十分に取れない母親たち」というように，学生は「こ

表1　育児教室参加実習に関連した学生の気づきや学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容
母子の支援のポイント	子どもの個別性を捉え母子の生活に合わせる（11）	母親が行うことを見守りアドバイスを加えることで、母親が継続できるようにサポートしていく
		家で忙しい母親も児をあやしたり抱っこしながらできるので、家でも実践しやすく続けられそう
		コミュニケーションをとる中で、それぞれの生活の特徴、例えば利き手や家のつくりについて聞き、それに合わせた工夫の方法を紹介していた
		母親の生活の様子や子どもの発達に合わせた個別的なアドバイスで、インターネットの情報よりも自分に合った方法が見つかる場となっている
		母親や児をアセスメントし、生活と結びつけながらアドバイスを行う
	母親の気持ちに寄り添いながら母子一体で関わる（18）	母親と児をそれぞれで捉えるのではなく、一体で捉えることが求められる
		支援者は母親たちがしていることを決して否定せずに助言する働きかけ
		母親の判断を認めるといった姿勢や話の聞き方が相談に来た母親が不安や悩みを言いやすい雰囲気をつくっている
		子どもの発育発達や特徴に合わせながら、母親にとっても負担なくできる方法を提供できることで、母親が育児に自信をもって家に帰れるようにと考え専門職が関わっている
		母親が不安に思っていることに対処法を教えたり、納得するまで説明を行い、育児への不安が軽減されるように対処されていた
		お母さんが必要としている情報を先回りして伝えたり、安心できるような声掛けをしていた
		交流の場となっていたり、不安や疑問が解消されたりすることで、育児への自信につながっている場所だとわかった
	適切な支援につなげるために細やかに観察する（8）	関わることのできる場を見つけたり、自ら作ってコミュニケーションをとることでお母さんたちの考えを知る
		会った時から恰好や表情からアセスメントしたり、授乳の様子を観察して、情報を集めていくことが必要である
		悩みを取りこぼさないように各ブースにいる専門職の人が赤ちゃんの泣いている意味や愛着形成、生活力、全身状態、発達の観察、危険予防を行ってニーズに答えられるよう整えている
		看護者は母親の抱き方を見て適度な愛着形成ができているかなど細かな項目を数分で観察していた
産後の生活の見え方の広がり	終わりのない育児に気づき、母親の疲労感を実感する（9）	忙しい生活の中で離乳食をつくるだけでもそのような苦労があり、なかなか時間を設けることが難しい
		託児で(たった)1時間でも腕が痛くてあと背中も辛かった
		これを24時間毎日するとなると疲れるだろうなと思った
		育児に追われ自分の時間が十分に取れない母親たち
		母親と離れた途端に大泣きし始める子どもが多く、それだけ普段は母親と一緒にいる時間が長いのだなと感じた
		退院後の生活は褥婦にとって本当に疲労が蓄積されていくものだなと感じた
	日々不安を抱えている母親の思いを感じる（15）	母親たちは手探り状態で育児に奮闘しているのだと感じた
		些細な子どもの変化には母親は敏感であり、それを一人で抱え込むことで不安になる
		情報があふれている現代だからこそ、情報の取捨選択も難しい
		成長段階、時期が違えば悩みなども変わる
		今の大変さを乗り越えても次の発達段階で新たな大変さが生じるというように連続的に起こっている
		「最初は眠れない大変さで今は一日中台所にいる大変さ」と言っており、育児に終わりはないのだと改めて感じた
	子どもの成長が母親の喜びであることがわかる（6）	身長が伸び体重が増えることは、子どもの成長を感じられ嬉しさにつながる
		自分の育児で成長したと感じられることは、母親の育児への自信にもつながる
		母親たちは子どもの成長が遅いか、小さいかとても敏感な様子
		子どものために少しでも良いことをしてあげたいという気持ちを強く感じた
	子育てに影響する要因に気づく（5）	初めての育児であったり移住してきて不安が大きい母親
		雨だと赤ちゃんを抱っこしてこなくてはならないので大変ということもあり参加が少なかった
		多くの母親が「育児書では～」という言葉を発している

れが24時間毎日」であることを考え，産後の母親の疲労は，退院後も蓄積されていくことや育児に終わりがないことを実感していた。このような9の記述から<*終わりのない育児に気づき，母親の疲労感を実感*>したり，一つの問題が解決されても子どもが成長すれば新たな悩みが出てくることから，「母親たちは手探り状態で育児に奮闘しているのだなと感じた」という15の記述から<*日々不安を抱えている母親の思いを感じ*>たりしていた。

「自分の育児で成長したと感じられることは，母親の育児への自信にもつながる」というように育児相談や栄養相談の場面で，一見些細に見える子どもの変化に母親はとても敏感であることなどに気づいた6の記述から不安を感じながらも<*子どもの成長が育児の自信につながる*>と母親の思いにも気持ちを寄せることができていた。「雨だと赤ちゃんを抱っこして来なくてはならないので大変ということもあり，参加が少なかった」などという5の記述から<*子育てに影響する要因に気づく*>という学びもあった。

３）【育児教室という社会資源の必要性】

このカテゴリーは21の記述を含む3つのカテゴリーで形成された。

「育児教室という場そのものが母親にとって安心できる要素」「地域の保健所や保健センターだけでなく，民間も協力しながら地域で子育てをさせていることが分かった」というような10の記述から母子を支える支援者の多様性と母親の思いを重ね，<*育児教室を求める母親のニーズを理解する*>ことができていることが分かった。また「（同じ月齢でも）いろんな発達（状況）の子どもをみて，発達には個別性があるということが理解できた」というような4の記述から子どもと関わる機会の少ない母親たちにとって<*母親が子どもの成長のイメージを広げる*>ことにつながっていることに気づいたり，「心と体のメンテナンスになっている」「家から外に出ることで気分転換になっている」などという７の記述から<*母親にとって気分転換の場となっている*>ことも理解することができていた。

４）【母子の交流の意味】

このカテゴリーは18の記述を含む2つのサブカテゴリーで形成された。

「母親同士で他愛もない話をしている時は楽しそう」などの７の記述から<*子どもや共通の話題から交流が広がる*>場であることに気づいていることが分かった。また「お母さん同士や子ども同士がとても近く，ここから社会性が広がって情報交換が行われる」や「ネットだけではわからない先輩ママからの話を聞くよい機会になっており，核家族化が進む現代にとってはとても大切な機会だと感じた」などの11の記述から育児教室が<*母親同士の交流によって連帯感や母としての成長につながっている*>場であるという意味を見出していた。

５）【学生が見出した母子の支援と課題】

このカテゴリーは17の記述を含む3つのサブカテゴリーで形成された。

「なぜそれがいいのか根拠を付け加えることで両親は納得しやすくなるのだと思った」という４の記述から，方法を伝えるだけでなく先に続く育児を見通し根拠を持った支援を感じ取り<*先を見すえ根拠を持った支援の必要性に気づく*>ことができていた。また「母子を別々にすることで，お母さんがリフレッシュする機会を作ったり，児が他の人と関わる時間を作ったりしているのだとわかった」ということから病棟実習では母子同室によって愛着形成を促しているが，< *意図的に母子を離すことが母親の心身を整えることにつながる*>という違いを感じ取ることもできていた。

さらに病棟実習を経験しているからこそ「母親たちに手が差し伸べられるのは入院中であり病院で関わりを持つことになる看護者であり，退院後母子がより良い暮らしが行えるようにサポートすることが重要な役割としてある」という3の記述から<*出産後から退院までに母子に必要な支援を考える*>ともできていた。ほかにも「数時間の

表1　育児教室参加実習に関連した学生の気づきや学び（続き）

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容
育児教室という社会資源の必要性	育児教室を求める母親のニーズを理解する（10）	育児教室という場そのものが母親にとって安心できる要素
		多職種が対象に様々な方面からアプローチしていることがこのような教室の強み
		任意の教室だからこそ、本当に支援の必要な母親が来れていないという可能性もあるということがわかった
		地域の保健所や保健センターだけでなく、民間も協力しながら地域で子育てを支えていることがわかった
		現在はインターネットの普及でたくさんの情報があふれていて、その情報が正しいのか正しくないのか、正しい情報を提供することが大切
	母親が子どもの成長のイメージを広げる（4）	母親がこれから先の子どもの発達状況などをイメージすることができる
		月齢の高い子どもの発達をみて自分の子どもの成長をイメージできる
		いろんな発達を送っている子どもをみて発達には個別性があるということを理解できる
	母親にとって気分転換の場となっている（7）	心と体のメンテナンスになっている
		気分もリフレッシュできる
		母親にとっては日頃のストレスを発散できる場
		家から外へ出ることで気分転換になっている
		日頃の抱っこの仕方の工夫で身体の負担を避けることも伝えていて、すごく母親の知りたい情報だろうと感じた
母子の交流の意味	子どもや共通の話題から交流が広がる（7）	月齢が近い乳児が多く、お母さん同士のコミュニティの場である
		母親どうして他愛もない話をしている時が楽しそう
		子どもは隣の子に興味を持ったことで、そこから母親同士の交流が始まっていく
		会話ができること自体がお母さんたちにとってリフレッシュできる要因
		親子ビクスでは母親と児は一緒に参加し、母親同士、児同士の交流になっていることがわかった
	母親同士の交流によって連帯感や母としての成長につながる（11）	お母さん同士や子ども同士がとても近くここから社会性が広がって情報交換が行われる
		ネットなどだけでは分からない先輩ママからの話を聞く良い機会になっており、核家族化が進む現代にとってはとても大切な機会だと感じた
		育児をしているのは自分だけではない、たくさんの仲間がいるということが実感できる時間
		助け合って孤立した子育てではなくなっていく
		他の家族と触れ合うことで、児はいつもとは違う環境や人とのコミュニケーションを図る場として社会性を身につける機会となる
学生が見出した母子の支援と課題	先を見すえ根拠を持ったケアの必要性に気づく（4）	なぜそれがいいのか根拠を付け加えることで両親は納得しやすくなるのだと思った
		情報をただ伝えるだけでなく、その人のまわりの環境も知り、何がより必要なのかを考えることでその人にあった看護になっていた
	意図的に母子を離すことが母親の心身を整えることにつながる（6）	母親を一人に慣れる時間をつくることで、少しでも気持ちをリラックスできたり、自分のことを考える時間になる
		母子を別々にすることで、お母さんがリフレッシュする時間を作ったり、児が他の人と関わる時間を作ったりしているのだとわかった
		余計なことを考えず自分の心を身体だけに意識を向ける貴重な時間
		子育て中の母親は児に関心が向き、自分のことはおろそかになりやすいが、ヨガをすることで自分の身体に関心を向けられるのではないか
	出産後から退院までに母子に必要な支援を考える（3）	出産後は家に帰ると手探り状態で忙しい日々がスタートするのだと思うと、病院で十分に急用を取り、育児に対する不安が起こりうるであろう問題を事前に予測して関わる
		母親たちに手が差し伸べられるのは入院中に病院で関わりを持つことになる看護者であり、退院後母子がより良い暮らしが行えるようサポートすることが重要な役割としてある
	知識が不足しているとケアにつながらないと実感する（4）	しっかりした知識を持ち、お母さんの意見も尊重しつつ認識を改めていけるようにすることが必要
		数時間の関わりの中でわずかな情報を取り出して解決を目指すために、支援者の正しい知識や多くの情報が必要になる

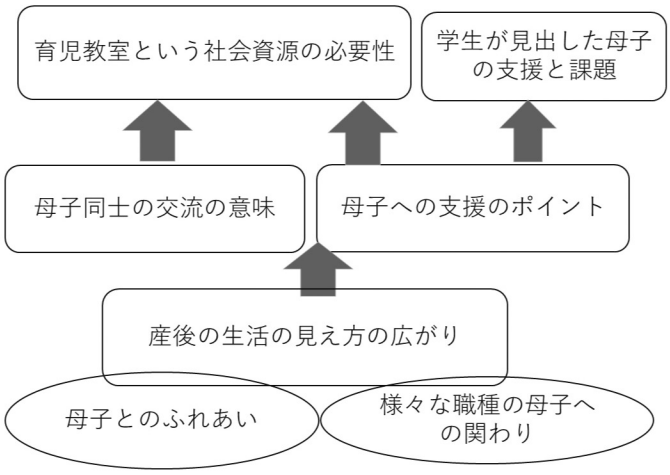

図１　学生の学びの内容

のかかわりの中でわずかな情報を取り出して解決を目指すために，支援者の正しい知識や多くの情報が必要になる」という4の記述から支援者の関わりを知ることで自己の学びの段階を振り返り＜*知識が不足しているとケアにつながらないと実感*＞していた。

このように学生は，支援者の関わりから母子の支援のポイントを捉えるだけでなく，これまでの学びや自己の学びの段階を振り返りながら学生自身で母子の支援や課題を見出すことができていた。

2.　学生の学びの内容（図１）

カテゴリー間の関連より検討した地域で開催される育児教室を活用し母性看護学実習の学びの内容が以下のように明らかとなった。

学生は，育児教室に参加することによって病棟実習では描きにくかった【産後の母子の生活の見え方】が広がり，【母子の交流の意味】を理解できただけでなく，【育児教室という社会資源の必要性】を見出すことができていた。さらに育児教室の支援者の関わりから【母子の支援のポイント】を捉え，学生自身で【母子の支援と課題】を見出すことができていた。

Ⅳ．考察

１．育児教室参加による学生の学び

今回分析した結果，育児教室参加実習によって学生は，母子の退院後の生活状況の見え方が大きく広がっていることが分かった。例えば学生は子どものお世話をしている場面で，母親と離れた瞬間に大泣きし，母親が戻るとぴたりと泣き止む子ども達と接していた。

病棟実習の母子は愛着形成の途上にあり，新生児が母親を追い求めて泣くことはない。この場面から学生は，退院後数か月で形成される母子関係の強さを感じ取ったことが考えられる。それとともにその愛着形成の背景には，母親の日々の育児の積み重ねがあり，子ども優先の生活を送る母親たちの現状を考えることができていたのではないか。

また同じ子どものお世話の場面で，たった１時間子どもの世話をするだけで学生は，疲労し子育ての大変さを実感する一方で育児相談の場面では，子育てに悩みながらも子どもの成長が母親の喜びであり，育児の自信につながることに気づき，母子が様々な経験を積みながら親子の絆を深めていくという特性の理解につながっていることが見えてきた。

このように産後の生活状況の見え方が広がって

くると，核家族化が進み，終わりのない育児を先の見えない状態で母親一人だけで悩みを抱えることがどれほど危機的な状況をもたらすかということを考えることができていた。そのうえで母子の交流は，単なる情報交換だけではなく子どもを通して社会とつながり，母親を孤独にしないという意味があると捉えることができたのではないかと考える。

また門ら[5]の研究において，場の違いによる様々な看護方法や母子を取り巻く現状や問題を周産期から育児期まで延長してとらえられることが，母子を支える人々が多様に存在していることの認識につながっていることが明らかとなっている。この育児教室にも看護職以外の専門職がおり，それぞれの専門性を活かした支援を行っている。学生たちは，専門職者と母親の関わりから日々の生活の中で生じる母親の様々な育児の悩みを知り，退院後の母子の生活の現状を具体的に描くことができていた。そこから母子を支える多様な職種に気づくだけでなく，社会資源の必要性についても実感を伴った理解につながっていた。さらに適切な支援につなげるために細やかに観察が行われていることや母親の生活に合わせた支援の重要性も学ぶことができていた。それに加え，それぞれの専門職者が母親の悩みに対して的確に助言をしている様子から自己の知識不足を振り返り，学習の意欲を高めることができていた。

これらから母子と触れ合い，様々な職種と母子との関わりを観察することで，学生は産後の母子の生活状況をリアルに描き，産褥早期にある母子へのケアの意味や退院後の社会資源の必要性の理解を深めていることが分かった。

このような視点が広がる実習効果は，育児教室に参加すれば必ずもたらされるというものではない。唐田ら[6]の研究では，地域の子育て支援実習は学生の長期的な視点を育む一助になることは明らかとなったが，親の発達過程を示す学びは低かったことが報告されている。しかし我々の研究では，親子の愛着形成に関するものや母親にとって何が育児の自信につながっているかというような親としての発達について述べている記述も多くあった。これは本学では実習前に事前の準備・オリエンテーションにて実習でのねらい・見学の視点などを十分に理解して臨むことができるようにしている。これが学びの深さや広がりを左右すると考えている。

2．母性看護学実習に地域で開催される育児教室を活用する意義

産後の入院中から退院後の母子の生活状況を予測した支援を提供するためには，退院後の個別な生活を描く，先を見すえた視点が看護職者に求められる。母性看護学実習において学生たちが受け持つ産褥早期にある褥婦は，分娩疲労や後陣痛などの身体的苦痛，母乳育児確立のための頻回授乳などにより，非常に疲弊した状態にあることが多い。そのため学生たちは，褥婦の回復を進めていくケアを中心に看護過程を展開し，退院後も続く母子の生活状況を描くことが難しいことがある。また，病産院における産褥期の支援は，入院中の状況を中心に実施されており，退院後の親子が遭遇する変化や問題に対応したものになっていないことも指摘されている[7]。今回の学生たちも産後の疲弊した褥婦の受け持ち実習においては，その時の褥婦の状況を描くことに必死になっている様子もあった。

しかし育児教室に参加した母子との関わりを通して，学生たちは退院後の育児の現状を肌で感じ，終わりのない育児だからこそ切れ目のない支援が必要であるという理解を深めることができたと考える。

我々が実習場として選択した育児教室は，看護職者が中心となって開催しており，医師や助産師による子どもの健康相談や母乳相談，母親のリラクゼーションや子どもとの遊び方などの講座で構成されており，育児中の母親の悩みや疲労の緩和や，子どもの発達に合わせた遊びを取り入れた内容な

ど母子のニーズに合った教室であった。そのため学生たちにとって，地域で生活する母親の気持ちや子どもの成長発達の見えやすい場であったといえる。地域で生活する母親の状況が描けたことで，「出産後は家に帰ると手探り状態で忙しい日々がスタートするのだと思うと，病院で十分に休息をとり，育児に対する不安が起こりうるであろう問題を予測して関わる」など，入院中の支援とつなげて考えることもできる。このように母性看護において，母子の退院後の生活を見据えたケアは重要なポイントである。つまり退院後の母子の生活について実感を伴った理解が深まる育児教室を利用した母性看護学実習は意義があることが示唆された。

V．本研究の限界と課題

本研究は，単年度の学生の育児教室参加実習の学びや気づきについての質的分析であり一般化するには限界がある。今後は学生の理解が不足している部分についても検討を進めていきたい。

VI．結論

学生の実習レポートより抽出した128の学びや気づきの文章を分析した結果，【母子の支援のポイント】，【産後の生活の見え方の広がり】，【育児教室という社会資源の必要性】，【母子の交流の意味】，【学生が見出した母子の支援と課題】の5つのカテゴリーを形成することができた。

母性看護学実習に地域で開催される育児教室を活用することによって，学生たちは産後の母子の生活の見え方が広がり，母子にとっての社会資源の必要性も理解することができていた。さらに育児教室の様々な支援者の母子への関わりから，母子の支援のポイントをより明確にし，学生自身で母子の支援と課題を見出すことにつながっていることが明らかとなった。よって地域で開催される育児教室は，学生にとって教育的効果があることが明らかとなった。

謝辞

本研究の主旨をご理解いただき，ご協力いただきました実習施設の皆様，学生の皆様に心より感謝申し上げます。なお，本研究は第39回日本看護科学学会学術集会（2019年12月：石川県）において発表したものに加筆修正を加えた。

引用文献

1）山口さつき，澤田みどり（2019）：子育て支援センター実習を取り入れた母性看護学実習の検討，旭川保健福祉学部紀要，11，25-29.
2）門貴代美(2020)：保健センター実習を取り入れた母性看護学実習における学生の学び，静岡県母性衛生学会学術誌，9（1），7-13.
3）唐田順子，大賀明子，畑野花奈（2016）：地域子育て支援施設実習を組み入れた母性看護学実習の教育プログラムの効果-学生の長期的な視点を育むための試み-，日本母性衛生学会誌，56（4），667-676.
4）前掲載２）
5）前掲載２）
6）前掲載３）
7）唐田順子(2008)：病産院における子育てを見据えた産褥期の支援の実態と助産師の役割，母性衛生，49（2），362.

Activity Report

Educational outcomes of a maternal nursing practicum utilizing community childcare classes
― Perception of the post-discharge life of mother and child ―

Sayori Iki, Misako Nagatsuru. Rie Ohno, Mai Nagatomo

【Key words】 Maternal Nursing Practicum, community childcare classes the post-discharge life of mother and child, Educational outcomes

Sayori Iki, Misako Nagatsuru. Rie Ohno, Mai Nagatomo：Miyazaki Prefectural Nursing University